

特集

子どもが変わる！

小学校英語

必修化も検討され、先生方にはますます身近なものになってきている「小学校英語活動」。しかし、その取り組み方は学校によって様々です。そこで長年、公立の小学校英語の実践研究と指導に携わってこられた渡邊寛治先生に、あらためて小学校英語活動のあり方、そしてその魅力について語っていただきました。

目標は「英語によるコミュニケーション力」

小学校の英語活動を通して、子どもたちに身につけさせたい力は何でしょうか。小学校における英語活動のあり方から考えてみます。

まず、英語活動の出口として、義務教育課程の最後である中学校の卒業段階で何が求められているのかを考えます。中学校の学習指導要領には、外国語科の教科目標に「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、

聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」と定められています。

よく中学校では「英語そのものを学習すること」が求められていると思っている方も多いのですが、実はそうではなく、本当は「英語によるコミュニケーション力」をつけるために外国語教育があるのです。ここはとても大切なポイントです。

日本の戦後における外国語教育では、1969（昭和44）年に中・高の外国語教育に関する方針が大きく変わりました。それまでは、英語を学ぶ、つまり文法や単語を覚えるという

渡邊 寛治 先生

1946年 三重県生まれ。文京学院大学外国語学部教授／国立教育政策研究所名誉所員。

米国州立ユタ大学大学院修士課程（言語学・TESL）修了。上越教育大学大学院助教授、国立教育政策研究所教育課程研究センター総括研究官を経て現職。「日本の外国語教育のあり方」や「学力評価」に関する教育課程研究の他、現在、さいたま市、成田市、品川区、北区、豊島区、目黒区、三鷹市等の小中連携英語教育改革事業を指導。

「学習活動」でした。簡単に言えば、英語を理解し、読めれば良いという程度の内容が目標とされてきました。

しかし、高度経済成長が進む中、「日本が国際化していくには、国際的に通用する英語コミュニケーション力をつける必要がある」「英語そのものを学ぶことを目標とする学習活動をしていても、実践的なコミュニケーション力は身につかない」という考えから、国の政策が大きく変わりました。英語を理解する「学習活動」から、コミュニケーション力を育てる「言語活動」への変更です。それが現在まで続いています。

ですから、小学校の英語教育も「英語によるコミュニケーション活動」として考えなくてはなりません。「言語習得」のための学習ではないのです。英語活動を通して身につけさせたいのは「英語の理解力」ではなく「英語によるコミュニケーション力」なのです。

「コミュニケーション力」とは

では、コミュニケーション力とは何かということを考えてみます。コミュニケーション力には二つの面があります。一つは、『異文化を越えて通じるコミュニケーション力』。例えば「Do you have a watch?」と聞かれたらどう答えますか? 「Yes, I do.」とどう答える方は「学習活動」程度の結果によるものです。「Yes, it is two o'clock.」というように、今何時かどうかまで答えることができれば、これはコミュニケーション重視の

「言語活動」の成果です。つまり、聞き手の言葉に込められた意味までくみとって答えることができるような力が、小・中の英語活動で身につけさせたいコミュニケーションの一つなのです。

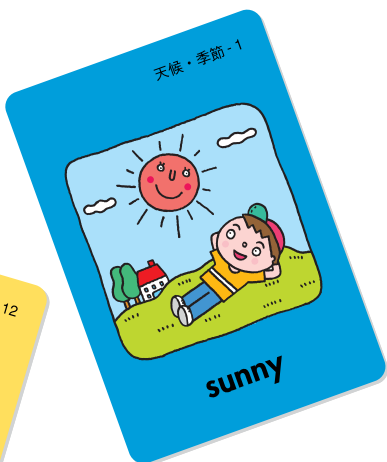
もう一つは、『自文化特有のコミュニケーション力』です。英語圏の文化は思ったことを全て言葉で表します。「How are you?」「Fine, thank you.」という会話も、日本語に訳すと不自然な部分がありますよね。「ご機嫌いかがですか?」「私は元気です。(聞いてくれて)ありがとうございます。一般の日本人なら、「どう?」「あつ、どうも」くらいでしょうか。日本人は、聞いてくれたお礼なんて、いちいち口には出しません。これは文化の違いなのです。日本には「以心伝心」や「沈黙は金」という言葉があります。これはこれで日本のとてもよい文化だと思えますが、国際社会では通用しません。「常に自己決定し、相手に言葉で伝える力」は、日本では育ちにくいのが現実です。

文化の違いを感じた例をもう一つあげると、私が英語活動の指導に行ったある小学校で、「何色が好き?」というゲーム活動をしました。ALT(注)が「Mayumi, what color do you like?」と質問をしたところ、まゆみちゃんは「うんと…」。「えつと…」と言うだけで、答えることができない。まゆみちゃんは英語が分からないわけではないのです。自己決定ができないのです。こういうとき、ALTはどうするか。彼らは待つのです。「OK, Mayumi, I like blue. I like red, too.」「Do you like red?」など、まゆみちゃんにいろいろと話しかけます。日本人の先生の場合、指名した児童が答えられないと、隣の児童にふって

しまうことがよくあります。でも、ALTは、この子に自分で決めさせて発信させる教育の大切さを無意識のうちに知っている。彼らはそういう文化で育ってきたからです。人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を、彼らは自然に身につけているんですね。これは国際教育で求められているコミュニケーションの一つです。

話し手の意図をくみとり、自分の考えを決定して相手に積極的に伝えること。日本の国際教育で求めているのは、まさにこういった「自己決定・行動力」や「主体性」なのです。決して英語そのものを学ぶことが第一義ではありません。したがって、小・中の英語活動で育む「コミュニケーション力」も、最終的にはそのような資質・能力ということになります。

注: ALTはAssistant Language Teacher(外国語指導助手)の略で、外国語の授業において補助的な役割を果たす、外国語にたけた指導者(外国人)のことです。



子どもが変わる！

私は平成4年から、全国300校以上の公立小学校の英語活動を支援してきました。その中で最大の成果は何かと言いますと、それは英語活動を通して子どもが変わっていくということですね。まさしく子どもの目が輝いてくるんです。寡黙だった子が英語の歌を喜んで歌っていくうちに明るくなっていったとか、おとなしかった子が英語活動を通して活発になっていった、不登校だった児童がALTとの英語活動のときだけ教室に来られるようになった、という例もあります。また、日本語ではどうしてもうまくコミュニケーションがとれないのに、英語だと他の子と同じようにコミュニケーションができる。これは、コミュニケーションの手段として英語を使うことで、他の子どもたちと同じスタートラインに立てたということも大きく影響しているのだと思います。ある学校ではこんな例がありました。入学してから2年間ひとこともしゃべらなかつた児童がいたのですが、あるとき、突然お気に入りのALTと英語と日本語でしゃべるようになったのです。ALTは、普段からその子どもをものすごく可愛がり、たくさん話しかけたり抱きしめたりして、コミュニケーションをたくさんとっていました。きつと二人の間に、信頼関係が築けたのでしよう。

喜びやコミュニケーションの楽しさを知っている。さらに、ALTたちは子どもをたくさん誉める習慣がありますから、子どもたちは誉められる喜びを味わいながら自信を得ていく。ALTとの英語活動によって、子どもたちの中に「挑戦する心」や「生きる力」につながる「意欲」が確実に育まれてきていると感じています。

先生も変わる！

先生へのメッセージ

小学校の先生の中には、英語に自信がないから…、英語が苦手だから…、と不安を感じている方も数多くいるでしょう。でも、担任が英語を「教える」というのは大きな誤解です。繰り返しになりますが、小学校英語教育のねらいは、英語の学習ではなく、英語によるコミュニケーション力の育成です。担任の先生は、英語のポートではないのですから、英語のことで悩む必要はありません。英語については、ALTやボランティアの力を借りたり、予算が少なければ英語ソフト教材を使ったりすればいいでしょう。では、担任の先生の役割は何なのか。それは、子どもの育みをみとることです。具体的に言いますと、どのような資質・能力を育もうとするのかを考えること、そして、その教育成果の責任を果たすことが担任の役目です。映画のプロデューサーのようなものかもしれません。だって、学校でいちばんその子どものことを分かっているのは担任なのですから。

それから、もう一つ大切な役割があります。それは、子どもと一緒にコミュニケーション活動に参加するということです。子どもと一緒に英語で歌ったり、踊ったり、ALTとコミュニケーションをしたりすることです。担任の先生が照れながらも一生懸命に英語でコミュニケーションを図る姿を見ると、子どもはとても喜びます。英語活動を実施することで、クラスが明るくなり、先生に対しても親近感が生まれて学級経営がうまくいく例もよくあります。

子どもが変わる。そして先生も変わる。さらに学校も変わっていく。こういう例を数多く見ました。これこそが小学校の英語活動の魅力であり、目指すところなのだと思います。



イラスト：新学社 カードdeえいご／高橋雅彦

おしえて! 寛治先生

Q 「英語活動の指導案を作成するときの留意点は、どのようなことですか？」

A もっとも大切なことは、英語活動のねらいと、到達目標(評価規準)を明確にすることです。その活動を通して「子どもの何を育むのか」「何を評価するのか」を十分に考えて指導案を作成してください。とりわけ到達目標(評価規準)は子どもをみとる上で、重要なカギとなります。活動の内容としては、言語や文化に関心を持たせつつ、子どもの関心事やALTとのコミュニケーション体験を重視した活動を多く取り入れるように心掛けてください。

Q 「指導方法の留意点は、どのようなことですか？」

A まず、してはいけないことは、言葉のしくみ(英語のルールなどの知識)を教え込むことです。中学校の授業で学習することの前倒しをする必要はありません。次に、すべきことですが、子どもたちに「なぜ英語活動をするのか」という動機づけをしっかりと行ってください。また、活動の主役は子どもであって、教師ではありません。教師主導型の授業をするのではなく、常に子どもを軸にした教育をしていくことが重要です。

Q

- 英語活動では、日本語の説明は必要ですか？
- 発音に自信がないのですが、どのように指導をしたらいいですか？
- 子どもたちに、「英語でこれはどう言うの?」と聞かれてわからないときは？
- アルファベットの指導はしなくてもいいのですか？
- ALTとのT.T.(チーム・ティーチング)で注意することは？
- 子どもたちが主体的に取り組むためにはどうすればいいですか？
- 学級担任が単独で英語活動を行う場合の留意点はありますか？
- 指導上の留意点は何ですか？
- 教材選びで重視することは何ですか？
- 学年に応じて、活動内容をどのように変えるべきですか？
- 国際理解教育を進めるには、どのようなカリキュラムを編成するべきですか？
- 日常生活で英語を使う必要性のない子どもたちが、英語活動を行う意味は？
- 国際理解教育のねらいとは何ですか？
- 小学校英語活動で育てたい子ども像とは何ですか？



先生の回答は新学社ホームページに詳しく掲載されています。そのほかに、活動実践例や活動計画例などのご紹介もありますので、ぜひご覧ください! http://www.sing.co.jp/school/el_en/

イラスト: タムラサリー

ねらい

世界の名所旧跡に関心をもつ。

～行ったことがありますか？～

評価規準 ・外国には日本でも有名な名所旧跡があることを理解している。
・名所旧跡に関する会話を進んで行っている。

ALT: Assistant Language Teacher
外国語指導助手

HRT: Home Room Teacher
担任

S: Student
児童

1 あいさつ

ALT: How are you?

S: I'm fine, thank you! And how are you?

ALT: I'm fine, too, thank you!



▲ハッサン先生
7か国語も話せる
ALTです。

2 うた

HRT: Stand up!

ALT: Let's sing a song!



COUNTRY ROADS~♪



3 練習

ALT: What's this?

S: Tokyo tower!

ALT: Have you ever been to Tokyo tower?

S: Yes, I have!



名所旧跡のカードを使ってみんなで言ってみた後は、
2人1組になって会話をします。

小学校英語活動

行ってきました！ 見てきました！

■ 実践校データ ■

学校 _____
千葉県成田市立公津こうづ小学校

学級 _____
6年1組

児童数 _____
35名

公津小学校は、英語科・
国語科を中心として、
コミュニケーション能
力や表現力の向上を図
ることを重点の一つと
して取り組んでいる。

4 カルタゲーム

ALT: Put your hands on your head!

"Have you ever been to Rain forest?"

S: "Have you ever been to Rain forest?"

ALT: "No, I haven't."

S: "No, I haven't."

ALT: "Have you ever been to Rain forest?"

S: "Have you ever been to Rain forest?"

ALT: "Yes, I have."

S: "Yes, I have."

ALT: ...GO!

評価のポイント

外国の名所旧跡を知り、自ら積極的にカルタゲームに取り組んでいるところ。



リピートの後、ALTの“GO!”のかけ声でいっせいに名所旧跡のカードを取り合います。

“...GORILLA!”のかけ声に、思わずおてつきをする児童が続出!

5 ジャンケン会話大会

S1: Have you ever been to Mt. Fuji?

S2: Yes, I have. Have you ever been to Amazon river?

S1: No, I haven't.

S1+S2: Rock, paper, scissors, go!

評価のポイント

行ったこと、見たことがあるかを進んで尋ねたり、はっきり答えたりしているところ。

1対1でジャンケン。勝ったらカルタをもらえます。カルタをたくさんゲットできた児童には、シールを贈呈!



▲ 渡邊浩章先生

「小学校英語」は本当に試行錯誤の連続です。でも、教師が自分たちでプログラムしていくことができるのが英語活動の良さだと思っています。英語を使ったコミュニケーション活動を通して、子どもたちの前向きな心や明るい気持ちや育つような授業をしたいといつも考えています。

「夢の広がるプランニングをしていきたい。」

先生に聞く



「先生の話す英語が
だいたい理解できる
のが楽しい」
「外国人と英語で話
せるようになるのが
嬉しい」
「友達とお話してシ
ールをもらえるのが
嬉しい」

「英語活動のどんなところが好きですか?」